

# 進路指導の充実に向けて

## - 学校と企業の橋渡しの立場に立って -

高知県立伊野商業高等学校 教 諭 小嶋 恭子

厳しい雇用情勢が続く中、国や県をはじめ雇用に関係する機関は様々な就職支援活動に取り組んでいる。しかしそのような中で進路指導の現状は学校と企業、教員と生徒さらには就職アドバイザーとの間に進路指導上に意識等のずれが存在しているように感じる。それぞれの立場からの意識面を探る事で、ずれの発見につなげ、企業に対しては企業訪問などの機会を通して高校生の魅力などを訴えていく。こうした積み重ねが求人開拓の一つの方法として、望ましい進路指導に向けた一歩になるのではないかと考え研究活動に取り組んだ。

キーワード：進路指導、指導方法、学校教育、地域社会、Web ページ

### 1 はじめに

近年の高校生の厳しい就職状況、若年層の離職率の増加や未就職のままの卒業生やフリーター志向などは、高校生の職業観・勤労観などの不足と社会状況などが複雑に絡みあって生まれた現象であり、大きな社会問題になっている。その中で、職業観・勤労観などの早期意識づけは重要であり、高校生活において進路指導を計画的・継続的に進めていくことができれば、自己の進路について考え、主体的な選択・決定能力の形成にもつながると考える。そこで15年度の研究活動ではホームルーム活動の場を進路指導実践の場として捉えた研究活動に取り組み、高等学校の進路指導の原点を振り返った。その中で進路指導とは何かを考え、進路指導に必要不可欠な要素を「5つの活動」として捉え、3年間で体系的に取り組むための進路指導プラン作成例を挙げた。また現在、高等学校の中で利用されている進路学習ノートの利用状況の実態を調べることで、進路学習ノートの必要性とその有効活用を図るための方法としてWeb ページ化に取り組んだ。これにより、各校の実情に合わせた必要箇所の選択・編集が可能となり、効率的な指導へとつながっていくのではないかと期待を込めての取り組みであった。

本年度は昨年度の研究内容やその成果を柱に置き、研究活動を進めることができた。また、企業訪問等を含め多くの企業の方々と接する機会も得た。このような機会を通して特に感じたことは、進路指導に対する捉え方である。進路指導の現状は、人材を育成する学校現場とその人材を求める企業側との間に何らかの「ずれ」があるように感じる。さらに、このことは進路指導を実践する側である教員と指導・援助される側である生徒間にも存在しているのではないかと考えた。こうしたことから、企業や教員、生徒、さらには就職アドバイザーからの声を聞き、それぞれの立場からの進路指導に対する意識を探ることにより、より望ましい進路指導に近づけるヒントが得られるのではないかと考えた。さらに現状の進路指導に抱く生徒の興味・期待・不安などを探ることは、生徒の進路意識の把握と有意義な進路指導の発見にもつながるのではないかと考えた。さらには企業訪問などを通して、新規高卒者への正しい理解やその魅力などを訴えるとともに、求人確保、開拓をする上での一つの考えになることを期待して本テーマを設定した。

### 2 研究目的

学校現場や企業の声聞くことで、進路指導に対する考え方を知ることができ、進路指導意識のずれの発見につながるのではないだろうか。またそれにより、より望ましい進路指導に近づくことができるとともに、この機会を通して、新規高卒者への理解やその魅力などを訴えることで、学校と企業の橋渡しとしての効果も図られるであろう。

### 3 研究内容

#### (1) 基礎研究

- ア 平成 15 年度の進路指導研究活動における課題
- イ 就対協での就職に関する情報収集
- ウ 進路指導上の問題点と課題

#### (2) 調査研究

- ア「進路指導に関する調査」アンケート（教員、就職アドバイザー、生徒）
- イ「スキルアップ講習会」受講生へのアンケート

#### (3) 実践研究

- ア 企業訪問
- イ 高校生自己 PR 表のデータベース化
- ウ フリーター問題について
- エ 進路学習ノート及び研究結果資料の Web ページ化（15 年度からの継続）

### 4 研究の概要

#### (1) 新規高校卒業者の就職の現状

高知県下の平成 16 年 3 月高校新規卒業者の就職内定率は 79.1%（高知労働局発表）であり、全国 46 位と厳しい状況であった。また平成 17 年 2 月の文部科学省の発表によると、平成 17 年 3 月の高知県高校新規卒業予定者の就職内定率（12 月末現在）は 61.1%であり、前年同期と比較すると若干上がってはいるものの以前厳しい状況が続いている。

こうした中で高知県教育委員会は就職アドバイザーの配置や保護者対象の啓発事業、学校現場ではスキルアップ講習会の開催など積極的な就職支援活動に力をいれている。またその一方では教員や就職アドバイザーが生徒の進路多様化に伴う、指導方法の難さに苦労しているのが現状である。

#### (2) 進路（指導）意識に関するアンケートの実施

##### 調査概要

ア 調査対象：3 年ホーム主任・進路指導部所属教員及び就職アドバイザー

調査目的：学校現場における進路指導の取り組みや企業訪問などの実体験を通じた意見や感想、進路指導に関する情報を収集する。また企業と学校、教員と就職アドバイザーとの間に存在する「ずれ」を発見するとともに、今後の進路指導の充実に役立てることを目的とする。

実施時期：7 月～8 月

イ 調査対象：平成 17 年 3 月卒業予定の県立高校 3 年生

調査目的：進路に抱く興味や関心、期待や不安などの本音を聞くとともに、学校での進路学習をどのように捉えているのかについて理解する。さらに生徒が進路指導に望んでいる内容や情報を探ると同時に、より良い進路指導への判断資料を得ることを目的とする。

実施時期：11 月～12 月

##### 調査票送付高等学校

就職アドバイザー配置校（18 校）

## 回収状況

教員 183 名

生徒 604 名

就職アドバイザー18 名

### (3) 新規高等学校卒業者の就職難の原因

高等学校卒業者の就職をめぐる厳しい状況の背景を考えたとき、経済状況の悪化、生徒の進路意識問題、家庭環境や保護者の意識等の問題、学校の進路指導の問題などが挙げられる。

#### 経済環境の悪化とフリーター人口の増加

高知県経営者協会が高知県内の事業所対象に実施したアンケート結果では、高校新卒者の就職難の原因として、「経済環境の悪化に問題がある」に「そう思う」という回答をした事業所が約 60%と最も多い。また、教員・就職アドバイザーのアンケート調査の意見からも同じ問題が挙げられている。高知県高等学校就職対策連絡協議会調査の求人事業所受付件数の推移を見ても、求人数が年々減少傾向にあり、大変厳しい現状がある。求人・求職者数の状況を県内外別に見てみると、県内に関しては求人数に対する求職者数が非常に多い。このことから特に高知県内における就職の厳しい実情があることが分かる。

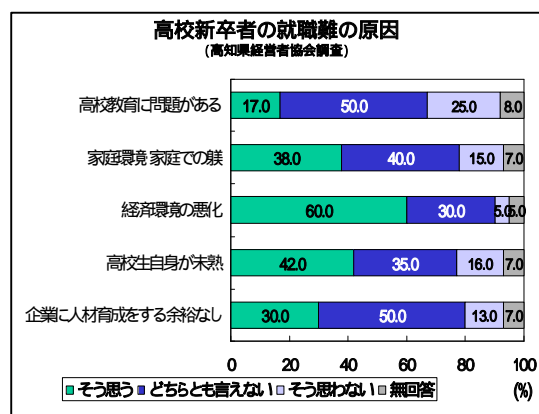
このように、就職したくてもできない現状がある中で、就職希望でありながら、それが果たせなかった子どもたち、あるいは卒業時に進路未定であった子どもたちの増加がフリーター（フリーアルバイト）増加の一因になっているとも言われている。

厚生労働省の調査ではこのフリーター人口は 200 万人以上にのぼると言われている。

このフリーター増加について、教員・就職アドバイザーのアンケート調査においては 70% の指導者が「フリーターの増加はやむをえない」という回答を出している。そして「目指す職が明確にあって、短期間ならいいのではないか」「本人が良ければそれでよし」「フリーターは甘えた考えであり絶対に駄目」という順に続いている。

しかし、このフリーター増加の背景には雇用形態の多様化が大きく影響していると考えられる。正社員以外の雇用の種類としてパートタイマーやアルバイト、契約社員、派遣社員などがあるが、いずれも必要に応じて生まれたものであり、こうした労働市場がなければもっと多くの企業が倒産したであろうし、失業者はもっと増えていだろうということも考えられる。なぜなら、今企業は、新卒者を採用しても一から育てる時間もお金も余裕もない企業が多い。中途採用者が増えている一因はここにもある。安い給料で人件費を削減し、会社の経営が悪化し、リストラが必要になればすぐに解雇して雇用を調整することができる。安価でいつでも雇用できる労働力を求めている。また、労働者側はこうした雇用形態の中に気軽に色々な仕事を体験してみたい、自分に合わない仕事ならしたくないという安定や収入よりもやりがい、時間的余裕などを求めているのではないかと考えることができる。その中でどう働くかは働く人の姿勢によって違ってくるのだと思う。しかし、企業のフリーターに対する評価はまだまだ厳しいということは心に留めておく必要があり、生徒にも投げかけていかなければならない問題である。

そこでこのフリーターという問題に対して、生徒たちはどういう考えを持っているかを調査した。その結果、「自分の夢のためならフリーターでも良い」という回答が 50%を超えた



【図 1】

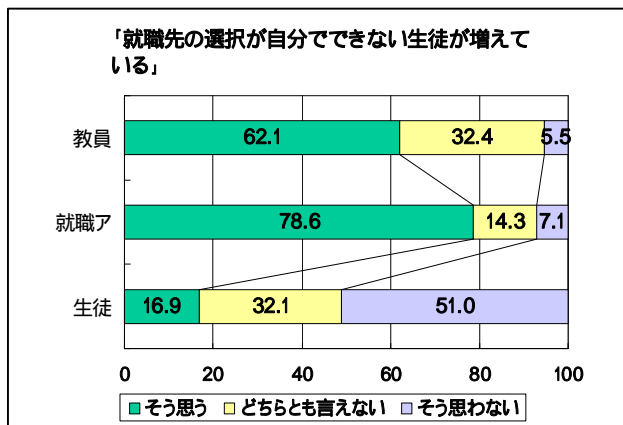
一方で、フリーターになることで起こりうる不利益などの問題については、ほとんど理解されていないことが分かった。平均月収13~14万と言われる現状の中で、ほとんどが親の援助を受けている現実を生徒たちはどのように感じているのか、進路指導の際にはこの問題についても積極的に取り組んでいく必要性を感じる。さらにフリーターよりも深刻な問題となっているのがニートと呼ばれる人たちの増加である。「学生でも主婦でもなく、訓練中でもない無職の若者」という定義がされているが、全国でこのニート人口が、年々増加傾向にあると言われている。「何もしたくない」のか、あるいは「何をすればいいのか分からない」のか指導・援助の手が特に必要なのはこうした生徒たちかもしれない。

高知県高等学校就職対策連絡協議会の調査では、高知県内の全、定、通の生徒で「進路未定者」の数が2月末時点で278名という結果になっている。この進路未定者がフリーターやニート予備軍と考えるとこの生徒たちへの支援が今後の課題にもなってくると思われる。

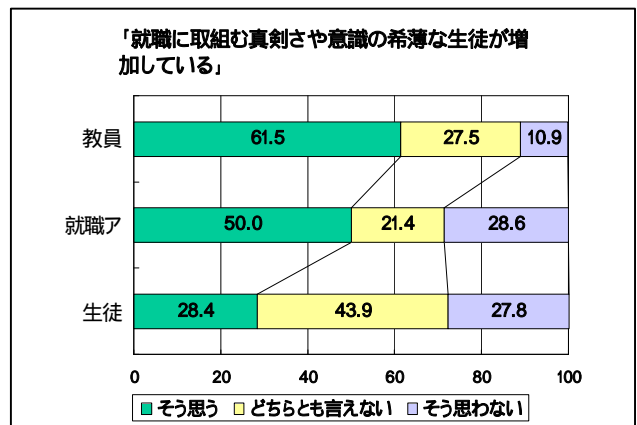
### 未熟な高校生

高知県経営者協会が高知県下事業所対象に実施したアンケート結果では、今の高校生について企業側がどのような印象を持っているかについて「自分の意思で就職先を選択できていないのではないか」がトップを占め、意識面の低さを指摘する声が高いことが分かる。企業側が就職時に重視する要素については、仕事への意欲や責任感、組織で働くために必要な人間関係作りなどの能力を求めていることが分かる。本研究活動の企業訪問の際にも、担当者から「意欲・やる気があればその力でカバーできるものが多くある。とにかくやる気、その姿勢を見せて欲しい」とよく言われた。

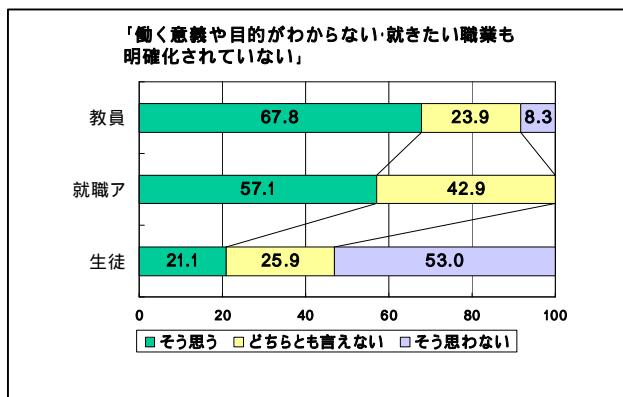
生徒アンケート調査結果からこの問題について触れてみたい。



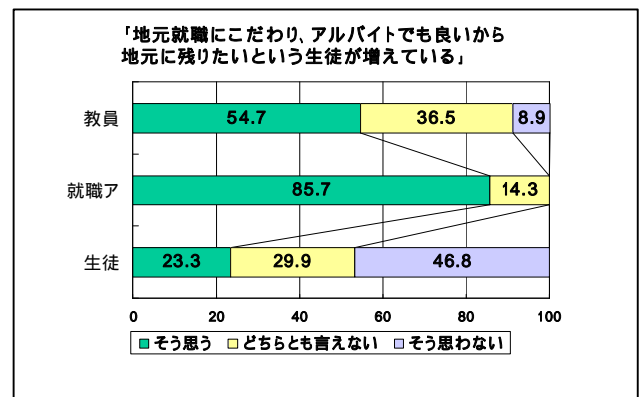
【図2】



【図3】



【図4】



【図5】

図2～図5から企業が指摘する職業意識の低下における問題については、多くの指導者もそう感じていることが分かる。しかし、生徒側は「そうは思わない」という傾向が強いことが分かる。「就職先の選択が自分でできない」「就職に取り組む真剣さや意義の希薄な生徒が増加している」「働く意義や目的が分からない・就きたい仕事に明確化されていない」「地元就職にこだわり、アルバイトでも良いから地元に残りたいという生徒が増えてきている」などは進路指導の会及び就職アドバイザーの会などでよく論議された内容である。しかし、生徒たちはそんなことはないという意識を持っている。ここに「ずれ」が出ている。生徒たちの中には就職に対する自分の意思や考えをしっかりと持ちながらも、それが上手く活かされていない状況が存在していることも考えられる。それは進路相談であったり、様々な場面において実在しているのではないだろうか。

しかし、これらのずれには進路に関して時間をかけて話しあえば解決できるものも多くあるのではないかと感じる。今まで以上に、生徒たちの声に耳を傾ける姿勢が今求められているのではないだろうか。

### 家庭環境・保護者の意識

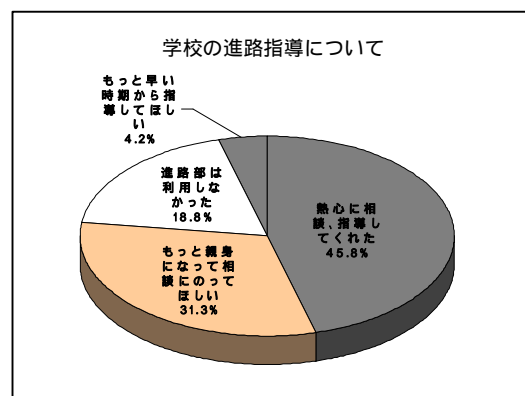
「保護者は就職が厳しいことは十分認識している。しかし、自分の子に限っては大丈夫だと思っている。この意識こそが問題ではないか」という声がある。高知県も保護者の意識啓発は重要課題だと認識し、保護者啓発事業に力を入れている。しかし、この事業に参加する保護者の数が少ないことは大変残念なことである。生徒のアンケート調査結果では、進路について家族とよく話し合いをしている割合は約2人に1人という結果になった。進路選択・決定をする大切な時期にもっと家庭で話し合いをする必要があるのではないかと感じる。また、リクルートが実施した意識調査において「進路選択の際に親に係わって欲しい」という高校生は7割強もいるのに対し、親の方は「子どもの進路が決まるまで黙って見守る」という意見が7割になったという調査結果を発表している。ここにも親子間の意識の「ずれ」が存在している。

このような状況の中、進路指導において指導者側がいくら必死になっても、雇用情勢と親の意識のずれが大きな壁となって存在しているのが現状である。「家庭環境や保護者意識の問題」、これはまた本研究活動を通して一番多く耳にしてきた言葉であったようにも思う。

### 学校教育に問題

「教育の失敗は一つの国を滅亡させるという。戦後以降の教育の失敗が今のような形でできただけ」(教員アンケート調査より抜粋)

この問題は指導者側つまり教員側に、進路指導に関するスキル不足や情報不足が存在していると指摘する声でもある。生徒アンケート調査では学校の進路指導について、図6に示すように「親身になって相談にのってくれた」は45.8%と高い割合になっている。その反面、「もっと相談にのってほしかった」という声も31.3%あり、進路指導体制の再検討も必要であると考えられる。



【図6】

また、企業側からは教育の必要性を強く望むとともに、「学校の先生はもっと企業を知るべきだ」「生徒のセンスや個性を見抜く目を持って欲しい」などという厳しい声も聞こえてくる。企業は大変冷静な目で学校や教員を見ており、企業訪問などを通して企業の動向を探ると同時に、生徒たちの魅力を積極的にPRしていくことも重要だと思われる。また必要な取り組みとしては、教員と就職アドバイザー対象アンケート調査の意見をまとめてみると、「職業意識



や動機、知識の動機づけ」などがトップを占め、最近の問題を反映し「保護者の意識改革」や「フリーター問題についての学習」の必要性などが挙げられている。中には「経済情勢が変わらない限り無理ではないか」という意見もあった。

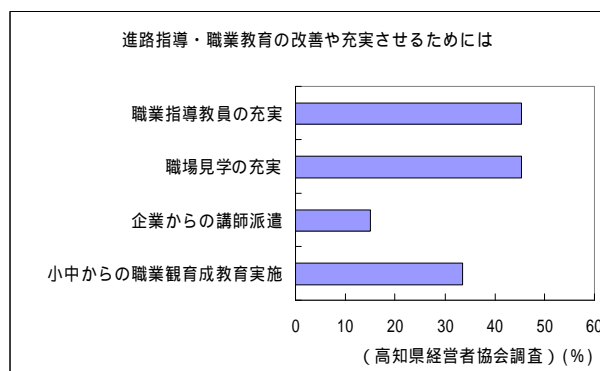
#### (4) 進路学習ノート Web ページ版

15年度から継続してきた進路学習ノートの Web ページ版が 16 年度に向けて実現されることになった。15 年度の進路学習ノートアンケート調査結果では、この進路学習ノートの必要性について「あれば利用する程度」が 62.6%と高い割合を示しているのに対し、「かなり必要で利用したい」がわずかに 6.7%であった。このことから、進路指導教材として進路学習ノートの必要性をあまり感じていない現状が明らかになった。その原因には、進路学習ノートの内容面での問題は勿論であるが、その他の「活用方法が分からない」「時間がない」などの声があった。これらの声に対応でき、学校現場が求めている情報や最新の就職動向に関するデータなどの内容を盛り込むなどの工夫をすることで、進路指導教材として今以上に価値ある教材に高めることができるのではないかと考え、Web 版を作成するきっかけであった。

この進路学習ノートは高等学校 3 年間で職業観・勤労観を育成し、進学する生徒にも就職する生徒にも対応できる内容になっている。「大学紹介ページ」や「就職状況に関する調査データ」なども追加し、有効活用できる内容になっているのではないと思われる。今後も改善を加えながら、さらにより良い教材になっていくと思われる。長い歴史のある進路学習ノートが、これからも有効活用されていくことを願いたい。

#### (5) 高校生の進路に関する各種会合への参加

- 就職アドバイザー業務連絡協議会、研修会（3回）
- 高等学校進路指導主事会、就職担当者会
- 就職促進緊急対策チーム会（2回）
- 保護者啓発進路講演会
- 職業教育関係学科主任会
- 企業合同説明会
- 求人事業所説明会
- 高知県高等学校就職対策連絡協議会（3回）
- 高校生スキルアップ講習会
- 求人事業所説明会
- 高校生就職フェア、就職ガイダンス
- 企業訪問
- 高知県産業教育審議会
- ハローワーク登録会
- 東京県人会総会
- 進路指導担当者向けセミナー



【図 7】



【写真 1】進路学習ノート

## 5 今後の課題と方向性

2年間の本研究活動において、企業及び学校の現状、教員・就職アドバイザーの苦悩と喜び、生徒にかける熱い思いなどを痛感した。そんな中で進路指導の現状を考えた時、学校現場と企業側、さらに教員と生徒の間に意識面で何らかの「ずれ」があるように感じた。教員・就職アドバイザー及び生徒アンケート調査結果からは職業意識に関する点において、生徒のレベルは教員や就職アドバイザーとの間に「ずれ」を生じていることが分かる。ここで進路学習の現状を考えたとき高校生は非常にあいまいな職業イメージしか得られない上、どのような能力が必要で自分がどの仕事に向いているのか、学習の中でどの能力を向上させて就職に備えればいいのかも分からず苦悩している実態があるのではないかとと思われる。その結果、生徒が明確な目標もなく、職業への考え方や態度が極めて未熟なまま社会へ送り出されるという事実が存在する。このような中で強い意志を持って職業選択・決定ができないことは否めないと思われる。

高知県経営者協会が県内238件の企業対象に16年9月に実施した調査によると、高校新卒者の就職難の原因について、経済環境の悪化(6割)、未熟な高校生、家庭環境(4割)、高校教育の問題(2割)をあげている。高校新卒者全体の印象については「意思の欠如」が約4割という回答結果であった。さらに、必要な能力等として就職時に重視する要素は「就労意欲や職業観」が72.3%と最も多くの企業からあげられていた。この結果からも考えることができるように、企業が期待し重視する能力は教科教育の専門性よりも就業意欲であるということが分かる。学校現場においては、これら企業側が求める人材把握とその方法を検討していく必要があると思われる。

以上のことから、高校新卒者の就職状況は確かに厳しい現状がある。生徒も保護者もその厳しさはある程度理解していると思われる。しかし、そこで何もしなければ何も変わらない。企業訪問を行い担当者の声を聞くことで意外な一面が見えることがある。職業観や勤労観の育成は学校現場だけでは限界があり、地域や家庭と共に育てるものだと考えると、早期から広い範囲で職業観教育を行い就業への動機づけを行うことが重要と思われる。さらに、経済不況と言われる今の子どもたちが置かれた環境を変えることはできなくても、その中において学校現場でできるキャリア教育がある。職業観や勤労観が働くことの意義や魅力に気づくことから芽生えるものだと考えたとき、その視点の先には親の働く姿があり、我々教員の姿が映るのではないだろうか。就職アドバイザーの熱意と粘り強さが企業開拓や内定率の上昇という形で実を結んだように、教員の情熱とやる気の姿勢が子供たちの内面を変えることができると信じ、そのためにできることを根気強く考えていくことが、進路指導の充実と成功に結びつくと思われる。

今回のアンケートに関しまして、その質問内容にいくつかの至らない表現等がありましたことをお詫び申し上げますとともに、ご協力頂きました各学校の先生方はじめ就職アドバイザーの皆様方、生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。

### 【主な引用・参考文献及びサイト】

- 「進路学習ノート」高知県教育委員会 2004
- 「超図解ホームページビルダー」エクスメディア 2001
- 「超図解 2002/2000ACCESSXP 総合版」エクスメディア 2002
- 「Z式マスターACCESS2000」株式会社アスキー 2001
- 「高校生の就職に関する検討会議報告」平成 13 年
- 「高卒者の職業生活の移行に関する研究」文部科学省・厚生労働省
- 「平成 16 年度進路指導主事会資料」高知県高等学校就職対策連絡協議会
- 「平成 16 年文部科学省高等学校就職状況」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm))
- 「全国高等学校進路指導協議会」  
(<http://www.mmjp.or.jp/Zenkousin/kuwayamah.htm>)
- 「入門進路指導・相談」福村出版 2001
- 「ホームページの作り方」松本都 (株)毎日コミュニケーションズ 2001
- 「HTML」シーズ著 2001
- 「就職対策連絡協議会」HP  
(<http://www.kochinet.ed.jp/shutaikyo/index.htm>)
- 「就職対策連絡協議会」就職に関する各種資料・データ
- 「できる Power Point 活用編」インプレス 2003
- 「スキルアップ講習会」テキスト・資料 2003
- 「キャリア教育の推進に関する総合的行サ研究協力回議報告書(案)」 2004  
～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～
- 「進路ジャーナル 2002」実務教育出版 2002
- 「13 歳のハローワーク」村上龍著
- 「キャリアガイダンス」リクルート
- 「高校生の採用に関するアンケート」調査結果報告書 高知県経営者協会 平成 17 年 1 月
- 「わが子をフリーターにしないために」読売ウィークリー 2004